

國學院大學学術情報リポジトリ

プロジェクト活動紹介

デジタル・ミュージアムの構築と展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001768

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

プロジェクト責任者 井上 順孝

1. プロジェクトの概要

本プロジェクトは平成 19(2007)年度から 3 年計画で行われてきており、今年度（平成 21(2009)年度）が最終年度にあたる。その課題は大きく 2 つあり、1 つは本学の学術資産および研究開発推進機構の研究成果などの統合的デジタル化・発信を目的として、そのためのシステムを構築し、展開させていくというものである。これは学内での教育などに還元することをも視野に入れたものであるが、具体的な活動としては、機構各機関を横断し、図書館や情報システム課とも連携する企画委員会と、主に実務担当者を中心とするワーキンググループを編成し、統合的なシステムの整備・運用を行ってきている。懸案であった新しい統合的なデータベースシステムについては、後述するように既に正式公開しているので、この整備・拡充を今後行っていくことになる。

もう 1 つは本プロジェクト独自のコンテンツ構築と研究の推進であり、これに関しては、オンライン神道事典 EOS の拡充、神道関係論文の双方向翻訳、また教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化などを行ってきている。いずれの課題も平成 14 年度から 18 年度にかけて行われた 21 世紀 COE プログラム『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成』の後継事業としての性格を担っている。

以下、これら両課題を中心に平成 20 年度の成果と、平成 21 年度の計画について概要を記す。なお、平成 21 年度のスタッフは以下のと

おりである。

責任者 井上順孝

分担者

平藤喜久子、星野靖二（専任教員）
石井研士、黒崎浩行、ノルマン・ヘイヴンズ（兼担教員）
市川収、カール・フレーレ（客員研究員）
市田雅崇、大澤広嗣（PD 研究員）
李和珍、モリー・ヴァラー（研究補助員）
ケイト・ナカイ、関守ゲイノー（客員教授）
アンネマリー・アイフラ、江島尚俊、エリック・シッケタンツ、ガイタニティス・ヤニス、キロス・イグナシオ、小堀馨子、ジャン＝ミシェル・ビュテル、高橋典史、武井順介、ドロシア・フィルス、松本喜以子、ミカ・ベルスハイム、山田美紀子、ロハニ、ビナヤク（共同研究員）

2. 平成 20 年度の成果

①機構全体に関わる成果

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

平成 20 年度の成果として、研究開発推進機構の各プロジェクトのデジタル化を統合的に推進するために、統合的なデータベースソフトウェアである富士通のミュージズテーク Musetheque を新規に導入し、國學院大學デジタル・ミュージアムとして運用を始めたことがまず挙げられる。

本プロジェクトでは既に平成 19 年度から計画を円滑に実施するために企画委員会を設

置き、情報の共有と各種問題についての協議を行っており、ミュージアムの採用についても同委員会における協議によるものであったが、平成 20 年度についても同様に企画委員会を編成し、事業を推進した。平成 20 年度の企画委員会のメンバーは以下のとおりである。

井上順孝（責任者）、石井研士、市川収、内川隆志、遠藤潤、大澤広嗣、小川直之、加瀬直弥、加藤里美、黒崎浩行、平藤喜久子、ノルマン・ヘイヴンズ、星野光樹、星野靖二、堀越祐一、松本久史（以上教員）、安達匠、及川聡、後藤幸雄、古山悟由、斉藤崇樹、堀内弘行（以上職員）

また、平成 19 年度同様に、実務担当者を中心にワーキンググループを編成し、個別のデータベースと全体のシステムの構築に関する技術的な問題について、富士通の担当者と協議しながら諸案件の調整を行った。平成 20 年度のワーキンググループのメンバーは以下のとおりである。

井上順孝、市川収、加瀬直弥、平藤喜久子、星野靖二、星野光樹、松本久史、中村耕作、安達匠、及川聡、後藤幸雄、斉藤崇樹、堀内弘行

具体的な活動実績としては、企画委員会を 3 回行ってデジタル・ミュージアム全体について協議し、ワーキンググループと富士通との打ち合わせを計 12 回行って細部を調整した。特に 8 月から 10 月にかけて集中的に協議して仕様を確定させ、年末にかけて個別のデータベースの移行作業を行い、平成 21 年初頭に AMC 棟にサーバを設置して新システムを稼働させている。なお、仮稼働と各種調整を経て、公開は平成 21 年 5 月 15 日となった。

公開時のデータベースは次のとおりである。「宮地直一博士写真資料」、「皇學館大学神道

研究所所蔵原田敏明每文社文庫写真資料」、「神道・神社史料 DB（古代神社 DB、現代神社 DB）」、「国学関連人物 DB」、「図書館デジタルライブラリー」、「大場磐雄博士写真資料」、「大場磐雄博士資料」、「柴田常恵写真資料」、「杉山林継博士収蔵資料」、「考古学資料館所蔵縄文土器」、「考古学資料館発掘調査報告書」、「折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料」、「Encyclopedia of Shinto」、「Basic Terms of Shinto」。

また、平成 20 年度中に今後デジタル・ミュージアムにデータベースを追加していく際の基準や手続きについて意見が出され、議論が行われた。これについては平成 21 年度の計画において後述する。

◇国際研究フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」

上述デジタル・ミュージアムと関連して、国際研究ネットワークを形成するため、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」との共催で国際研究フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」を平成 21 年 10 月 26 日に開催した。

同フォーラムの趣旨はウェブ上の情報を教育・研究においてどのように適切に用いていくか、またそこにどのような課題があるのかということを考え、かつ日本宗教・文化が日本語以外の言語においてどのように教えられているのかについて具体的な報告を受けながら、宗教文化教育との関わりについても議論を深めようとするものであり、第一部「研究者フォーラム」・第二部「国際研究フォーラム」という二部構成で行われた。

午前中に開かれた第一部のパネリストは次のとおりである。カール・フレーレ（カリフォルニア大学バークレー校大学院）、エリッ

ク・シッケタンツ（東京大学大学院）、ゴディノ・ローラン（フランス国立東洋言語文化大学大学院）、岡田昭人（東京外国語大学）、加瀬直弥（國學院大學）、平藤喜久子（國學院大學）。司会は黒崎浩行が行った。

午後に開かれた第二部の発題者はアラン・カミングス（ロンドン大学）、ミヒャエル・ヴァフトゥカ（テュービンゲン大学）、ジャン＝ミシェル・ビュテル（フランス国立東洋言語文化大学）の3名である。コメンテーターは師茂樹（花園大学）と渡辺学（南山大学）が務めた。司会は井上順孝が行った。

会議全体を通して、例えばウェブ上の情報の学術的な信頼性をどのように担保していくのかといったいくつかの課題も指摘されたが、インターネットを含めた情報通信技術が教育と研究においてもはや無視しえないものであることがあらためて確認され、また信頼できる学術的な情報をどのように発信していくのかという宗教文化教育と結びつく問題の重要性が論じられた。

②プロジェクト独自の成果

◇EOSの拡充

EOSの拡充について、従来のものに加えて動画と画像を追加した。第4章については、韓国語版を作成するために翻訳を開始した。また平成20年度に引き続き、神道の基本的な知識について画像を通して学ぶことができるウェブサイト Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guide の拡充を進め、社務所を中心とした図を追加し、更に今後追加する内容について検討を加えた。

◇双方向翻訳

平成18年度から行われている神道関係論文の双方向翻訳について、平成20年度は次の4点の翻訳を行った。日本語から英語へ1点、日本語から韓国語へ1点、英語から日本語へ

2点である。

日本語から英語へ翻訳されたのは渡部圭一「式内社・論社問題における書物と「口碑」

（英訳：Shikinaisha Authentication: Textual Sources and Oral Traditions）であり、訳者は関守ゲイノーである。日本語から韓国語へ翻訳されたのは青野正明「植民地朝鮮における農村振興運動期の「敬神崇祖」－朝鮮総督府の神社政策に関連して－」（韓国語訳：식민지 조선에 있어서 농촌진흥운동기의 「경신숭조(敬神崇祖)」－조선총독부의 신사정책과 관련하여－）であり、訳者は李和珍である。

また、英語から日本語へ翻訳されたのは Rafael Shoji, “The Failed Prophecy of Shinto Nationalism and the Rise of Japanese Brazilian Catholicism”（邦訳「神道ナショナリズムのはずれた予言と日系ブラジル人カトリックの興隆」。訳者：高橋典史）と、Jennifer Robertson, “*Ema*-gined Community: Votive Tablets (*ema*) and Strategic Ambivalence in Wartime Japan”（邦訳「絵馬から読み取る想像の共同体－戦中期日本における絵馬と戦略的二律背反性」。訳者：藤野陽平）である。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

まず、これまでに収集した教派神道資料について、神理教、神道修成派関連資料の整理とデジタル化を行った。これらは教団から提供され、日本文化研究所に保管されている資料であり、重要性の高いものから順次デジタル化を進め、オンライン公開に備えた。

また、神道系教団である祖神道（本部・熊本県玉名市）の教団資料について、これをスキャンしてPDFファイルにするという手順でデジタル化作業を行い、同時に基礎データについてのデータベース化に着手した。

3. 平成 21 年度の研究計画など

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

まず公開された國學院大學デジタル・ミュージアムについて、更に整備・拡充を行っていくことになる。平成 20 年度同様、主にワーキンググループを中心として定期的に打ち合わせを行い、新システムへの移行が順調であるかどうかを確認し、今後の運営について協議する。システムの運用については情報システム課と協力し、サーバの管理運営、あるいはデータの不具合に対する調整などを行う。

また、平成 20 年度中から懸案となっていた今後デジタル・ミュージアムにデータベースを追加していく際の基準や手続きについて原案を作成して議論し、これを受けて取り決められた原則を研究開発推進機構企画委員会と全学教授会で報告する。これによって学内の他の部署において作成された学術資産を統合的にデジタル化し、発信していくことを可能にする。また新システム上のコンテンツをできるだけ広く研究・教育に資するための研究会その他を開催する。

なお、平成 21 年度中に「万葉神事語辞典」の新システム上での公開を予定しているが、これは辰巳正明教授が旧日本文化研究所時代の兼担プロジェクトとして実施し、その成果として刊行された辞典をベースとするものである。当初よりオンラインでの刊行をあわせて行う計画であり、新システム導入を受けて画像データを新たに追加した上で公開する。他にホルトム文庫目録、祭祀遺跡データベース、また後述する教派神道および神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化を受けて教派神道関連資料 DB も新システム上で公開する予定である。

◇EOS の拡充

新システム導入に伴って、EOS の新システムへの移行作業を進める。動画や画像、音声

についてはこれを拡充し、神道の理解を深めてもらうための工夫をしていく。

また、もとの『神道事典』とは別に作成している初心者向けのウェブサイト Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guide について、平成 21 年度も引き続き拡充を進めていく。これについて、英語版の完成後は多言語対応とすることを目指している。

◇双方向翻訳

神道関係論文の相互翻訳についても引き続きこれを行う。日本語論文の英訳と英語論文の日本語訳を中心とするが、必要に応じてフランス語訳、中国語訳、韓国語訳なども試みる。平成 21 年度は 4 本の論文の翻訳を目標としている。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

旧日本文化研究所時代に神理教、神道修成派、黒住教の教団資料が収集されており、そのうち一部は翻刻がなされ、また研究成果が論文として刊行されている。既に公開に備えて重要な資料からデジタル化を進めていたが、新システムの導入を受けて、同システム上で公開する作業を開始する。これについては教団側の了解を得られたものから順次アップロードしていく。

また神道系新宗教の一つである祖神道の教団資料については、教団からの許可のもとにデジタル化とデータベース化を平成 20 年度より開始している。資料が膨大であるので、平成 21 年度に完了することは困難であるが、できる限りすみやかに基礎的作業を終える予定である。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

主に宗教教育、宗教文化という観点から、現代宗教に関する資料・データを収集するが、

本年はウェブ上の関連情報の収集を中心的に実施する。

◇国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」

21世紀COEプログラムを実施中に形成された国際的な研究者のネットワークを維持・展開させるために、広く宗教文化に関心を抱く国外の研究者を招聘し、日本側の研究者を含めて国際研究フォーラムを開催する。今年度は9月20日に「映画の中の宗教文化」というタイトルで行う予定であり、発題者とレスポネント（各5名）は次のとおりである。発題者：近藤光博（日本女子大学）、中町信孝（甲南大学）、Jean-Michel Butel（仏・INALCO）、Jolyon Thomas（米・プリンストン大学）、Gregory Watkins（米・スタンフォード大学）。レスポネント：臼杵陽（日本女子大学）、櫻井義秀（北海道大学）、冨澤かな（東京大学）、西村明（鹿児島大学）、山中弘（筑波大学）。また司会は井上順孝が務める。なお、このフォーラムは次に述べる科研費による事業と連携して行われる。

◇科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者・大正大学教授星野英紀）との関係

科学研究費補助金による同研究は、大正大学星野英紀教授を研究代表者として平成20年度より行われているが、同研究には研究分担者として本プロジェクトメンバーの井上順孝、黒崎浩行、平藤喜久子の3名、また連携研究者として同じく星野靖二と学術資料館の加瀬直弥の2名が加わって同研究の推進に当たっている。この研究により目指される大学における宗教文化教育の実質化においては、本プロジェクトの研究成果も重要な意義を持つことになるため、本プロジェクトと密接に連携の上、事業を推進していく。

平成21年度はすでに5月にハーバード大学が主催した国際比較神話学会を共催しており、参加者から内容とともに研究開発推進機構の施設が非常な好評を得た。前述したように9月には国際研究フォーラムを共催するが、これに加えて各種の研究会の共催も予定している。

また國學院大學はこの科研費が目指す「宗教文化士（仮称）」の推進に当たって、重要な役割を果たすと学外からも認識されているので、その意味でも本プロジェクトとの緊密な連携を今後も持続させる。